

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 13 日現在

機関番号：17601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25381265

研究課題名(和文)音楽教育における演奏指導力の研究

研究課題名(英文)Research of instructional ability for musical performance in music education.

研究代表者

菅 裕 (Suga, Hiroshi)

宮崎大学・教育学研究科(研究院)・教授

研究者番号：30272090

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、演奏表現指導方法について客観的な分析を試み、優れた指導を特徴づける要因を明らかにすることを目的としている。特に本研究では、指導者の発話と指導語のインタビュー、および演奏者の演奏データと演奏後のインタビューデータを用い、相互の関連性について分析を行った。その結果、優れた指導実績を持つ3名の指導者は、いずれもメタファーを含む間接的な指示によって演奏者の主体的な演奏表現変化を引き出そうとしていること、しかしながらこうした意図を持つ指示についての演奏者の受け止め方は場面によって異なっており、そのことがその後の演奏表現姿勢に大きく影響していることが明らかとなった。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research is to find out factors which characterize good music teacher by analysis on their instruction for improving player's musical expression. I videotaped instructional session with three keyboard players by three teachers who had certain experience of instructing a wind band or an orchestra and recorded the keyboard players' performance with MIDI data. I also made interviews with the instructors and the players. All of the three teachers focused on encouraging players' independence to change their musical expression by indirect words including metaphors. However, the words were received differently in each case by players and had strong influence on their subsequent attitude for performance.

研究分野：音楽科教育

キーワード：演奏指導 演奏表現 実践知

1. 研究開始当初の背景

音楽教師の専門性は、まず、児童・生徒の演奏表現を適切に診断・指導・改善する能力にある。しかしながら現在教員養成大学における音楽家としての能力の育成の機会、ピアノや声楽を中心とする実技学習とソルフェージュなどによる記譜・読譜トレーニングがその大半を占め、他者の演奏を診断したり指導したりすることを学ぶ場面はほとんどない。このため、実技学習を十分に積んでいるはずの大学生が、教育実習において、中学生の合唱に対して「何を指導したらよいかわからない」事態が生じている(申請者業績, 2007年)。

音楽科教師の実践的力量形成に関する研究(平成21~23年度基盤研究C)では、吹奏楽や声楽、その他の器楽の指導者の指導場面の分析や指導観についてのインタビュー調査から、演奏指導力の熟達化の要因を探索した。その結果、経験年数が比較的短い指導者を特徴付ける要素が「正確な演奏の追求」であるのに対し、経験年数の長い指導者は、楽曲構造についての演奏者の全体的理解を促進し、それに基づく自発的・積極的表現姿勢を引き出そうとしていることが明らかとなった。つまり熟練した指導者ほど記譜された音符の正確な再現よりも、豊かな演奏表現を学習者から引き出すことを重視していると言える。

一般的に演奏表現の指導は、学習者に対して「もっと強く」のように強弱や速度などの表現要素の修正方法を具体的に指示したり、楽曲の構造や表現意図について説明したりする他、指導者による模範演奏の提示や「さ

さやくように」などのメタファーの使用によって行われる。

先行研究からは言語的指示や説明よりもメタファーや模範演奏の方が、指導の効果が高いこと(Ebie 2004; Lehmann 1997)、指導者自身もメタファーや模範演奏が効果的であると考えていること(Lindström et al. 2003)が示されている。その一方で、模範演奏は指導者の望む演奏を正確に模倣させるには効果的だが、必ずしも学習者の自律的な表現変化を引き出すことができず(Woody 2006a)、場合によっては学習者のより高度な音楽的思考を阻害したり(Laukka 2004; Lehmann 1997)、指導者の要求が微妙な表現の修正である場合にはその意図が学習者に伝わらなかつたりすることが指摘されている(Woody 2002)。またメタファーによる指導についても、学習者の積極的な表現姿勢を引き出す可能性を持つ反面(Woody 2006b)、学習者を混乱させ動機づけの低下やフラストレーションにつながる恐れも指摘されている(Woody 2006a; Persson 1996)。

このように効果的な演奏表現指導についての見解はいまだ一致していない。

また演奏表現の指導スタイルは、学習者自身の音楽的スキルや知識の伝達を重視するか、あるいは学習者自身の自律的・主体的な表現喚起を重視するかによって変わる(Laukka 2004)。例えば前述したメタファーによる表現指導には、指導者が自分自身の中にある名状しがたい表現感覚を近似値的に学習者に伝達することを目的にする場合と、あえて学習者の内面に認知的な不協和を引き起こし、学習者自身の主体的な探究活動を喚起することを目的にする場合の2種類が

あることが明らかとなった（申請者業績 2012）。一般的に熟練指導者は、自身の演奏表現の単純な模倣を演奏者にさせることを避け、演奏者自身による探究活動を促進しようとする傾向にあることが明らかとなっている（申請者業績 2009; 北村他 2007; Schippers 2006）。しかしながらこれらの指導観の違いが、指導方法の選択を通して、演奏者の表現や演奏態度にどのような影響を与えるのかについては明らかになっていない。

こうした状況から、演奏表現指導力に焦点を当てた研究の構想に至った。

演奏表現は、演奏の質を決定する最も重要な要素であると一般的にみなされているにもかかわらず、その指導方法についての実証的な知見は非常に少ない（Laukka 2004; Lindström et al. 2003）。このため演奏指導については、指導者自身の経験や伝統的な方法に依存しているのが現状である（Persson 1996）。

本研究の特色は、これまで指導者の経験と直感に依存してきた演奏表現指導方法について客観的な分析を試み、優れた指導を特徴づける要因に明らかにし、それに基づく演奏指導力養成カリキュラムを開発しようとしているところにある。これまでの研究により、熟練指導者は、個々の音符の表層的なコントロールよりも演奏者自身の音楽的な理解に基づく主体的な表現姿勢を引き出すことを重視していることが明らかとなっている。このことから優れた演奏指導は、指導者からの一方的な指示・伝達ではなく、指導者と演奏者との間の創発的な性質を持つものであると推測される。もしそうであれば演奏指導の

要因は演奏者の演奏行動に対する直接的な働きかけと言うよりも、演奏者の演奏態度、あるいは演奏姿勢の変容を介した間接的な働きかけの中にあると考えられる。従来の演奏指導研究の多くは、指導者の直接的な指導行動のみに焦点を当てており、個々の指導方法と学習者の演奏表現や演奏態度との関係について分析したものはない。

演奏指導の熟達化を特徴づける要因を明らかにすることにより、音楽科教員養成課程において学生に身に付けさせるべき資質・能力を明確にし、優れた演奏指導力を持つ教員を養成していくことが可能となる。このことは小・中・高等学校における音楽の授業や吹奏楽・合唱等の部活動を含む学校教育全体の音楽水準を引き上げていくことにつながる。

2. 研究の目的

本研究の課題は次の3点である。

1. 熟練指導者の演奏表現指導の特徴を明らかにすること
2. 指導方法の違いが学習者の演奏表現や演奏態度に与える効果を明らかにすること

3. 研究の方法

演奏指導・学習場面の分析

1. 調査対象者

大学の実技指導教員（指揮）、宮崎県・鹿児島県高等学校・中学校音楽科教員および宮崎大学教育文化学部で声楽を担当している50代の大学教員。

2. 調査方法

・管弦楽・吹奏楽指導者の模擬指導場面の

分析

【演奏指導の実施】

高音部・中音部・低音部の3つの異なる旋律からなる3重奏作品を制作し、大学生3名により3台の電子キーボードで、強弱変化や速度変化をつけず“無表情”に演奏させ、MIDIファイルとして保存する。

調査対象者に、3名の演奏者に対する演奏指導をさせ、その様子をVTRに録画する(Sonyビデオカメラ)。

演奏指導終了後、再び、3名の演奏者に調査対象者の指示通りに演奏させ、MIDIファイルとして保存する。

【インタビュー調査】

演奏指導終了後、調査対象者に自身の演奏指導を振り返らせ、指導の意図やその効果、最終的な演奏の評価等についてインタビュー調査を行う。

【演奏分析】

MIDIファイル(指導前)とMIDIファイル(指導後)から、旋律内の各音符のタイミングと長さ、強弱、速度変化についての情報を抽出し、数値化する。

MIDIファイルとMIDIファイルのデータを比較し、指導前後の演奏表現の変化を分析する。

【総合分析】

以上の分析結果に基づき、優れた演奏表現指導を特徴付ける要因を明らかにする。

・声楽家による小学生指導場面の分析

声楽家による小学生の歌唱指導授業を観察し、その中で声楽家がメタファーを用いて指導をしている場面についてフィールドノートを作成するとともに、後日、VTRによっ

てこれらの場면을声楽家自身に振り返らせ、その場面での思考内容等についてインタビューを行った。

4. 研究成果

今回の調査で明らかになったことは、優れた指導実績を持つ3名の指導者は、いずれも直接的な指示ではなくメタファーを含む間接的な指示によって演奏者の主体的な演奏表現変化を引き出そうとしていることである。

しかしながらこうした意図を持つ指示についての演奏者の受け止め方は場面によって異なっており、そのことがその後の演奏表現姿勢に大きく影響している。

演奏者は、指導者の指示の意図について十分に理解できない状態であっても、質問や確認を行うことはない。指導者の発言には何らかの意味があるはずだと考え、指導者の意図を探りながら表現を変化させようと努力する。したがって、指導者側が演奏者側の主体性を引き出そうとしている場面でも、演奏者の中では、指導者の主導権が常に強く意識されている。

逆に、指導者の意図が明確に理解できていると感じられるときには、演奏者はより積極的に表現変化のための思考を展開しており、その表現が回を追うごとに強調されていくこともあった。

このように考えると演奏者の積極的な表現の喚起に成功している際の指導の手立ては、「初期の段階では学習者の能力を越える課題の要素を年長者が制御し、学習者の力量範囲で対処可能な課題要素の達成への集中」に導く「足場かけ」の過程を含むものである

といえる (Wood et al. 1976, p.90)。

また声楽家による小学生歌唱指導の授業観察とインタビューの分析から、声楽家はメタファー指導を通じて、演奏者の身体探求と能動的な音楽表現姿勢の促進を意図していることが明らかとなった。またこうしたメタファーによる指導力の原点として、演奏している時の自分自身や他者の身体感覚、つまり自身をも含みこむ匿名的な他者の実存的なあり方に対する豊かな想像力があると考えていることも明らかとなった。

Georgii-Hemming らは、授業の中で教える対象となっている音楽の知識について、教師と生徒、あるいは生徒同士の相互対話の中で創造的・対話的に立ち現われてくる実践的・応答的知識として捉えるべきであると述べている (Georgii-Hemming et al. 2013)。この知識観を採用したときに音楽教師にとって必要になるのは、どれだけ多くの音楽史的・音楽学的知識を持っているか、あるいはどれだけ豊富な指導方法を獲得しているかではなく、言語や非言語により生徒の芸術的な思考を触発し、音楽に対する生徒の発言や演奏表現を引き出し、さらにそれを発展させ、説得力のある意味を生徒とともに生成していく創造的・芸術的な能力であるということになる。

メタファーを含む「語りかけ」的指導力を教員養成においてどのように培っていくかを検討することが今後の課題である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

1. 菅裕・藤本いく代・葛西寛俊・阪本幹子・浦雄一・金本志秀・岡元雅代・谷口朋美・中馬越恵美・永江彩乃(2015)「幼・小・中連携による歌唱技能の発展的指導:歌唱領域達成課題系列の作成」『宮崎大学教育文化学部附属協働開発センター研究紀要』23号, 75-89頁(査読なし)。

〔学会発表〕(計2件)

1. 菅裕「音楽表現指導場面における指導者と演奏者の相互作用」(日本音楽教育学会第45回大会, 2014年10月25日, 於東京都渋谷区・聖心女子大学)
2. 菅裕・小八重沙希「実践的歌唱指導力に関する研究:児童指導場面における声楽家のメタファー使用」(日本音楽教育学会九州地区例会, 2016年2月28日, 大分県大分市・大分大学)

6. 研究組織

(1)研究代表者

菅 裕 (SUGA, Hiroshi)

宮崎大学大学院・教育学研究科・教授

研究者番号: 30272090